

## どうでもいいことと大事なこと

～心に潜む六つの価値観

お茶の水女子大学専任講師／臨床心理士

伊藤 亜矢子



ちよつと季節はずれですが、クリスマスの絵本を子どもに読み聞かせていた時のこと。P・コリントンという作家が描く天使や雪景色がすばらしく、降りしきる雪があまりに繊細で本物そっくりです。思わず見とれて、「ねえ、きれいだねえ。」と娘につぶやくと、娘のほうは「これトナカイの鼻赤くないよ。おかしいねえ。これじゃトナカイじゃないよこれ。なんでかねえ？なんで赤くないの？変だよ。」と真剣に言い続けています。

なんてすばらしい光景なんだろうと思っていた私は、内心がっかり。美しさなんか気にもとめずに、私から見ればどうでもよいようなトナカイの鼻に、なぜそんなにこだわっているんだろうと興ざめでした。

これが初めてではありません。別の絵本では、主人公

理論的人間、美に一番価値を感じるなら審美的人間です。

例えば理論的な人は、世の中の諸事を例外なく理論の網の目に整理したくて仕方ない人です。自分なりに見いだした理論（規則性）ですべてが例外なく説明できないと、気になって気になって仕方ないのです。でも審美的人間は、そんなことには全く価値を感じません。きれいなもの、すばらしい表現に浸ることが最大の幸福です。理論的人間の視点と審美的人間の感覚は時にかみ合いません。

さらに、経済的人間は、何事も効率よく無駄のないことを大事にします。単なる金儲けではなく、時間でも手間でも、無駄なく合理的・効果的に使うのが好きです。しかし、こうした態度は、例えば宗教的人間にとっては耐え難い態度かもしれません。宗教的な人は、人知を越えた大いなるものへの畏敬を深く感じ、それを尊重しようとしています。効率や合理性は、個人の利益を優先した俗世のつまらぬこと。それにこだわるのは卑しい人と感じるかもしれません。反対に経済的人間からみれば、宗教的人間の行動や考えは、非合理でまどろこしく、意味のない不可解なものと思えないかもしれません。

こんなふうに、相互に極めて対照的な価値観が、各人

の少年が、うきうきした気分をかみ殺すように、ちよつと口をへ文字に結んでいました。私は愉快な表現だなと楽しく読んでみると、娘は「なんでこの人怒っているの？おかしいねえ。おかしいよねえ。」と言い続けていました。

彼女にとっては、どうも「トナカイ＝赤い鼻」「へ文字＝怒りの表情」という公式があつて、それに合わないものは気になって気になって仕方ないのです。

反対に私は、場面構成や色彩の美しさにまず目を奪われます。挿絵がすばらしければ、それで満足。とくとそこに浸りたいのです。「へ文字＝怒り」なんて、まるで絵心を解さない無粋な発想。変なこと言わずに、すばらしい絵を味わつてよと言いたくなります。でも、こんなすれ違いは、読者の方にもよくあるのではないのでしょうか。年ごろのお嬢さんに大事なものが、父親には全く無価値で馬鹿げたことであつたり、同僚のこだわりがとても取るに足らないものと思えたり。価値観の相違です。

シュプランガーというドイツの思想家・心理学者は、人間の持つ価値観を大きく六つに分け、それによって人の性格を分類しています。六つの価値は、理論・宗教・美・社会・経済・権力です。理論に最も価値をおく人は

の性格の深くにまでしみ込んでいて、知らず知らずにならざるを得ない。日常的な判断や行動を大きく左右しています。自分にとってはどうでもいいもの、全く価値の感じられないもの。それを、極めて重視する人がいて、あたかもそのために生きているような人がいる。これはなかなか理解し難い現象です。何でそんな無価値なことを大事にするんだろう、何でこんなに大事なことが分からないのだろう、ついそう思つて、ぶつかり合つたり、相手を理解不能な変わり者と決めついたり。

理解しがたい子、理解しがたい親、理解しがたい同僚、誰でも身の回りに出会うそんな人たち。それは、もしかしたら思いもよらない別の価値体系を生きている人たちかもしれません。

参考：吉田 富一雄（編）心理測定尺度集2 人間と社会のつながりをとらえる（対人関係・価値観 サイエンス社）

酒井恵子（他）価値志向的精神作用

尺度の作成、教育心理学研究

Vol.45(4), pp.388～395.

